北海道の発展に寄与する外国人材の確保と共生を地域交流からめざす

陳　堯柏（チェン　ヤオボ）

札幌国際大学　観光学部専任講師
地域・産学連携センター副センター長

米国New Hampshire College大学院CIS修了。修士（CISコンピューター情報システム）。米国Southern New Hampshire University大学院英語教授法（TEFL）修了。修士（TEFL英語教授法）。米国Siebel Systems社でエンジニア、台湾私立Apple Pie Language School教務主任を経て、現職。専門は英語教育法、英語教育とICT、観光英語。

1　外国人受入と国際交流の意義

高齢化と少子化に対応するため日本政府は、外国人材を積極的に受け入れる取り組みを実施しています。その結果、雇用や教育などの機会を求めて多くの外国人が日本を訪れるようになってきていますが、北海道も例外ではありません。法務省の統計データによると、2019年には北海道で初めて在留外国人が４万人を突破し、2022年には４万５千人を超え、中でも留学生の数が増え続けています。しかしながら、高等人材とも言える外国人留学生は、様々な理由で卒業後は道外に流失しており、北海道産業の発展を担う貴重な人材として如何（いか）に確保できるかが課題であると言えます。

この問題を解決するために北海道は、「外国人材の受入拡大・共生に向けた対応方向」を策定し、５つの主な取り組みの基本方向を打ち出しています。そのうちの１つが「外国人と共に暮らすことの重要性を理解できる環境をつくる」であり、この目標を達成するために、「啓発活動の推進」「日本人と外国人との交流行事の開催」「地域における多文化共生の担い手となる人材の育成」という３つの具体的な施策を挙げています。また「北海道グローバル戦略」では、グローバル化のニーズに応えるためには、国際社会に貢献し、地域の発展を推進できる国際人材の育成が重要であるとされています。さらに札幌市が策定した「札幌市多文化共生・国際交流基本方針」では、外国人も日本人も安心できる住みやすいまちづくりを目指し、平和で包摂的な社会の実現に向けて、国籍・文化などの違いを認め合い尊重し合う相互理解が促進されることを目標に掲げています。

そうした中、国際化を推進して外国人との共生社会の実現を目指す札幌市は、2022年３月に札幌国際大学、札幌国際大学短期大学部、公益財団法人札幌国際プラザ、札幌市の４者で「国際交流・多文化共生の推進に関する連携協定」を結びました。この協定の下で札幌市教育委員会が遂行している「多文化共生社会創成プロジェクト」では、札幌国際大学の外国人留学生が札幌市立の中学校や小学校を訪問し、地域の文化交流に貢献する活動が積極的に行われています。

この交流事業が提案されたきっかけは、札幌市の小・中学校の児童生徒と大学の外国人留学生の双方にとって有益であるという趣旨と、筆者自身の経験によるものでした。筆者は台湾で生まれ育ち、アメリカの大学へ留学しましたが、留学中に地域住民との様々な交流活動に参加しました。これらの交流活動を通じて筆者は、異文化を深く理解することができ、語学力も大きく向上しました。さらに重要なことが、地域の人々との友情を築くことができ、帰属意識が生まれたことでした。その結果、大学院卒業後の数年間は引き続き現地に滞在し、就職してしばらく仕事を続けました。このような経験をもつ北海道在住外国人は、筆者だけでなく他にも様々な国籍や立場で存在することが推察され、またそこから北海道で学び、働く外国人材の確保や地域定着化につながる可能性も示唆されます。

札幌国際大学の外国人留学生に対し、卒業後の希望進路に関するアンケート調査を行ったところ、87％（107名中93名）が卒業後も日本に残って働きたいと考えており、さらに就職先の都道府県に関しては、複数回答で57％（93名中53名）が北海道を第一希望にしていることが分かりました（東京や横浜などの関東圏は51％［48名］、大阪や京都などの関西圏は44％［41名］）。しかしながら現実には、本人がどんなに住み続けたくても、卒業後に様々な理由で北海道を離れてしまう留学生が少なくありません。このような状況は、有能な外国人材の活躍による北海道の発展の妨げになるというネガティブな側面も否めません。こうしたポテンシャルの高い外国人が離れて行ってしまう全ての要因を排除することはできませんが、まずは地域定着に向けた初期段階として、草の根的な交流活動を通して留学生が地域の文化や人々の温かさを感じながら、北海道に対する帰属意識が高まることが望まれます。

例えば、札幌市内の小・中学校訪問は、地元の児童生徒らにとっても、外国人留学生との交流活動を通して国際的な知識や視野を養うことができ、また母国語が異なる人と英語や日本語を使ってコミュニケーションを図るスキルも鍛えることができます。さらにこうした経験が、今後の学習へのモチベーションにつながり、外国や世界のことに対して興味関心を高める第一歩となることも期待されます。

以上を踏まえて本稿では、外国人留学生が札幌市内小・中学校の児童生徒らと交流した２つの事例を紹介し、こうした取り組みが外国人材の確保と地域定着につながる可能性を検討したいと思います。

2　札幌市立義務教育学校福移学園での交流会

札幌市立義務教育学校福移学園（以下学園）は、豊かな自然と農業地に包まれている東区中沼町に位置する札幌市特認校の一つであり、札幌市初の義務教育学校です。小学校から中学校までの義務教育を９年間で一貫して行う特色ある教育を実施し、自立した札幌人の育成を重視している学校です。英語教育や国際性にも力を入れているため、札幌市教育委員会より交流活動の募集通知を受けた後、早速活動への強い意欲を示され、札幌国際大学が教育委員会と連絡調整を行った末、学園との国際交流会を実現するに至りました。参加者は、学園の８年生（中学２年生相当）の生徒たちと、札幌国際大学からネパール、マレーシア、韓国、中国、香港、ミャンマー出身の外国人留学生計11名が参加しました。

交流会の第一部は、学園８年生の生徒たちによるプレゼンテーションで、札幌や北海道でおすすめのスポットを授業で学んだ英語で紹介しました。このプレゼンテーションの実施は、生徒たちにとって語学力のスキルアップだけでなく、発表準備の過程で自分が育った環境について理解を深める機会にもなりました。留学生がよく知っている札幌または北海道にある観光地といえば、大勢の外国人旅行客が行く有名なスポットが

主ですが、今回生徒たちから紹介された場所は、地元の人がよく行く身近なスポットで、留学生がほとんど知らない場所でした。そのため、彼らにとっては嬉しい発見で、驚いている様子の反応が沢山見られました。

交流会の第二部では、学園の生徒たちが校内の各施設へ留学生を案内しました。留学生は通常授業の教室の他に図書館、音楽教室、実験教室なども見学しました。留学生はこれまで日本の小学校や中学校を訪問したことがなかったので、彼らにとって地元の小学校を直接自分の目で見て肌で感じながら見学することは貴重な体験で、とても深く印象に残ったそうです。構内見学の後は、留学生がそれぞれ自国の食べ物やおすすめの観光スポットなどをプレゼンテーションで紹介しました。生徒たちは熱心に耳を傾けて聞いている様子で、多くの驚きの反応から、彼らが受けたカルチャーショックの大きさを感じました。最後に、フリートークセクションが行われ、生徒と留学生がお互いに発表したプレゼンテーションの内容を基に自由に話し合いました。彼らの楽しそうな表情と笑い声が絶えず、この交流会の参加に非常に満足していることが良く伝わりました。

交流会終了後、参加者にアンケートを実施したところ、お互いの文化や学校生活の違いを知ることができただけでなく、お互いの考えや意見に対する理解も深められたことが分かりました。英語と日本語でコミュニケーションをとることができるという発見も有り難いことで、参加した生徒たちや留学生全員から、「またぜひ交流する機会があれば」との声が寄せられるほど満足した様子でした。将来的には留学生の出身国を訪問したいと話す生徒も多く、今回のイベント実施の意義は大きいものであったと言えるでしょう。

3　札幌市立石山緑小学校での交流会

12月初めの雪の舞う日に、美しい豊平川のほとりの南区・石山地区にある札幌市立石山緑小学校を訪問しました。同小学校は、旧石山小学校と旧石山南小学校を統合して開校された学校です。今回の交流イベントのテーマは「外国文化」と「日本文化」であり、他の訪問先での実施方法と少し異なるのが、コミュニケーションツールとして日本語のみを使用したことでした。小学校からは６年生70名、大学からはベトナム、マレーシア、香港、ミャンマー、台湾からの留学生計８名が参加しました。

留学生は、それぞれ母国の代表的なお祭りや食文化を紹介したり、母語を使って小学生に簡単な挨拶を教えたりしました。小学生は、外国の文化や言語に深い感銘を受けたようで、特に小学校の教育課程の関係で普段接する外国語は英語のみなので、今回のイベントを通じて様々な英語以外の外国語にも興味を持つようになりました。小学生が書いたお礼状の中には、「将来機会があれば、留学生の母国を訪問したい」という意見が多くありました。一方、留学生は、日本語で発表するのは初めてではないものの、緊張して説明がうまくできない場面も散見されましたが、彼らにとっても良い経験であり成長の場であったと感じました。

留学生による自国文化の発表が終わった後は、小学生が８つのグループに分かれてプレゼンテーションを行い、生け花や節分、折り紙、弓道、神社、招き猫や和菓子、味噌（みそ）、お茶など、日本を代表する文化や食について説明しました。小学生は、それぞれが紹介したい内容についてポスターを作成し、文字だけでなくイラストも描いて分かりやすく表現しました。作成過程においては、説明したいことを小学生が自分なりに調

べて把握する必要がありましたが、こうした経験を通して知識の習得だけでなく、自国の日本文化への理解そのものも一層深まることにつながりました。事前の準備作業は小学生にとってかなり大変のようでしたが、一緒に参加された小学校の先生方から伺った話によると、彼らは大学の留学生と交流できることを知っていたので、いつもよりも高い学習意欲を持って、イベントに参加することをとても楽しみにしながら準備していたそうです。

また、小学生は説明後に留学生から質問を受けることで、外国人とコミュニケーションをとる際の即時の反応の仕方や説明の仕方を学ぶことができました。彼らは留学生からコメントをもらうことで、自国の文化に関する外国人目線からの感想や意見を聞くことができ、さらに自分たちが見聞きしたことがある世界や物事を別の違った角度から見る視点も養うことができました。

今回の交流イベントは留学生にとってもメリットが多かったと言えます。例えば、小学生から紹介された文化について、ほとんど知らなかった、聞いたことがなかったという留学生がいましたが、交流会を通して日本や北海道の文化に対する理解をより深めることができたそうです。また、小学生が使う日本語と大学生が使う日本語には多くの違いがあり、分かりにくくて大変であったことも新鮮で勉強になったという意見もありました。小学生の説明内容を聞いて理解し、最後に質問をしたり、自分の気持ちを表現したりする必要もあったので、小学生にも伝わる分かりやすい表現力も身に付けました。総じて今回の交流活動は、留学生にとって日本語コミュニケーション能力を実践現場で鍛える貴重な機会となりました。交流イベント終了後に留学生から、地元の情報や日本の文化への理解が深まっただけでなく、小学生たちの熱意や親しみやすさを感じ、本当に驚いたとの感想がありました。今後も留学生が地域の人と親睦を深める活動に積極的に取り組んでいきたいと考えています。

4　地域交流による外国人材の確保と共生

以上本稿では、筆者が札幌国際大学の留学生と行った２つの学校訪問を事例に紹介しましたが、こうした交流活動は外国人と日本の児童生徒がお互いの異文化を学べるのと同時に、外国人が札幌や北海道の魅力をより実感し、地域への愛着を深化させるでしょう。そして札幌市内あるいは北海道内での将来的な就職や移住を模索する機会を多く見出すこと、さらにこうした就職や移住が実現に結び付くことで、北海道経済の発展に寄与する有能な外国人材の確保と道外への流失を防ぐことにもつながる可能性があります。一方、地元の小・中学生にとっては、異文化の理解、国際感覚の養成、対外国人コミュニケーション能力の向上などを図る体験型学習を実践していると言えます。また将来、北海道を国際舞台に押し上げられる人材になれるかどうかに対しても、ポジティブな効果をもたらすことが期待されます。

外国人が北海道に住み、根付き、定着するためには、彼らに地元の文化や習慣を理解し、好きになってもらうこと、そして地域住民と触れ合いながら、友情や地元への帰属意識を育んでもらうことが望まれます。そのための活動を、留学生の小・中学校訪問を中心に今後も札幌市内や道内でさらに広げていきたいと考えています。留学生が活躍する場をつくり、彼らの能力を活かすと同時に地元への定着にも結び付け、北海道の発展に寄与し得る外国人材の確保と持続的な共生を、地域交流を通して実現していくことができればと願っています。

参考文献・資料

・北海道（2023）『外国人材の受入拡大・共生に向けた対応方向（令和５年度改定）』北海道
・北海道総合政策部国際課・経済部国際経済課（2023）『北海道グローバル戦略（2023改訂版）の概要』北海道
・札幌市総務局国際部（2023）『札幌市多文化共生・国際交流基本方針～世界中の多様な人々とともに生きる都市さっぽろ～（案）』札幌市